

令和五年四月十日発行

皇學館論叢第五十六卷第一号 抜刷

紹介

皇學館大学創立百四十周年・

再興六十周年記念 『皇学論纂』

永
田
意
頼

皇學館大学創立百四十周年・
再興六十周年記念『皇学論纂』

永田意頼

皇學館は明治十五年に神宮祭主久邇宮朝彦親王の令達によ

り、林崎文庫に設置されて以来、百四十年を閲した。また、昭和二十一年には廃校となり、昭和三十七年の再興から六十年となる。皇學館大学はこれらの佳節に当たることから、皇學館大学創立百四十周年・再興六十周年の記念式典と併せて記念事業を行った。本書はこの記念事業の一環である記念学術事業として刊行された。

それでは本書の目次を示しておこう。

『武家年代記』裏書の研究

―編者・六波羅探題・元弘の変―

多田實道

水戸藩の地誌における『常陸国風土記』の受容

―水戸学形成の一側面として―

橋本雅之

近世の地域大社と社家の布教活動

―伊勢国多度神社と小串氏を事例として― 谷戸佑紀

明治三十八年東北地方大凶作と恩賜金

―宮城、福島、岩手三県における配付状況の比較―

宮城洋一郎

古川隆久『建国神話の社会史―史実と虚偽の境界―』を吟

味する

新田均

古代の神官祭祀と災害

平安時代における剣璽の動座について

塩川哲朗
佐野真人

序 皇學館大学長 河野 訓

皇学の発生

―契沖の「歌学」・春満の「神学」― 松浦光修

神仏習合の進展による大社の新宮創建とその祭祀

―尾張国の菩薩号神社の創建と大和国の若宮の成立―

井後政晏

大津崎門派 川島栗齋

―伝記・著述及び学問思想の一斑―

神仏分離の先例としての中国における仏教と固有宗教との

相剋

―明の世宗・嘉靖帝の仏教抑圧策―

谷省吾先生『神道原論』の成立

大伴坂上郎女「祭神歌」の訓釈

―『万葉集注釈』を中心に―

平安前期の宴における和歌の表現と機能

伊藤東涯『勢遊志』と奥田士亨について

「日本的なるもの」の流行と変容

―昭和十二年という特異点―

米国 Character Education の教育的効果に関する研究

―そのメカニズム解明のための一試論―

神宮皇學館と大陸

―海外修学旅行は学生に何を与えたか―

明治期の愛郷心教育に関する一考察

―文部省の教育政策を中心に―

原田敏明每文舎文庫写真資料の位置情報に関するGIS分析試論

坂井正斉

現代日本文学深耕―2

実証総合理論科学的日本学と実効実践科学的日本学の統合

―神坐す常若の杜の神都伊勢と神宿る玄海の孤島神郡

宗像沖ノ島― 宮川泰夫

Teaching Premodern Japanese Violence:

History and Heritage in the Classroom

CHRISTOPHER MIMAYO

(メイヨー・クリストファー)

執筆者一覧

本書は、皇學館大学の名誉教授・現職教員による二十二篇の

学術論文が収載されているが、目次からも分かるように、歴史

学・文学・神道学・宗教学・教育学など幅広い分野の研究成

果が示されている。これは従来の皇學館大学の記念出版とは異

なり、テーマを神宮や日本文化に限定していない。故に多彩な研

究者にとつて有意義なものとなるだろう。

それでは本書に収載されている論文の要点を、「皇學館」に

関連するものに絞って三つ紹介したい。

まず初めに、皇學館の名称に関わる「皇学」について論じて

いる松浦光修氏の「皇学の発生―契沖の「歌学」・春満の「神学」―」を取り上げたいと思う。

「はじめに」では、「皇学」と「国学」がまったく同じ学問の別称にすぎないのであるうか、という問題に対して、鎌田純一氏の「国学より更に日本の自覚をもたらす学、更に実践の学、時代に対処し得る学」という指摘を取り上げ、鎌田氏の指摘は一つの問題提起としては有益なものであったと述べている。そして、その指摘を妥当なものとするれば、そこから新たな課題がいくつか浮上するとして、

① 「国学」、「皇学」などをはじめとする、近世における日本文学・思想研究に対する呼称の、歴史的な展開を、個々の学者・思想家の文献に則して検討すること。

② ①で検討した呼称の歴史的な展開の背後に、何らかの学問的・思想的な相違点があるのかどうか、検討すること。

③ ②の検討をもととして、個々の学者・思想家の学問・思想の実態に即して、従来の学問的・思想的な呼称が妥当なものかどうか、検討すること。

④ ③までの検討をもととして、個々の学者・思想家の学問的・思想的な系統に関する従来の認識が、妥当なものかどうか、検討すること。

皇學館大學創立百四十周年・再興六十周年記念『皇學論纂』（永田）

の四点に絞って提起している。

本稿ではこの鎌田氏の指摘が妥当なものと仮定して、「皇学」、「国学」と呼称される学問思想が発生したとされる時期の学者・思想家について、具体的には契沖と荷田春満に焦点をあてて、問題の一端を検討することを述べている。

第一節「皇学」と「国学」の語の歴史的展開」では、「はじめに」で提起した課題のひとつ、「歴史的な展開を、個々の学者・思想家の文献に則して検討すること」について牟禮仁氏の論文をもとに述べている。

第二節「本居宣長の契沖観」では、「国学」「皇学」と呼ばれる学問思想が誰を起点(基点)としてはじまるのかという問題に対して、本居宣長の発言を取り上げ、本居宣長の契沖観について述べている。

第三節「契沖の「歌学」と「和学」」では、契沖自身は、わが国の古典に関する自らの研究をどのように認識していたのかについて検討し、「歌学」に絞ることが適していると述べている。

第四節「国学四大人観」と荷田春満」では、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤の四人を「国学四大人」とする概念が、いつごろ、誰によって、どのような過程で形成されたかについて、松浦氏の過去の論考を参照しながら述べている。また、『三哲小伝』が継承している、宣長の「契沖―真淵―宣長」

という自己の学問思想の系譜が、なぜ篤胤の『玉嚢』になると、「春満—真淵—宣長」へと変わるのかについて、伴蒿蹊の『近世畸人伝』と春満の歌集『春葉集』の出版に原因があるとして論じている。

第五節「創学校啓」の再検討」では、荷田春満が国学四大人の筆頭に挙げられることになった主たる原因は、『春葉集』の付録「創倭学校啓」（創学校啓）を春満の著作とされてきたことにあると考え、どのような経緯で「創学校啓」が春満の著作とされるようになったのかについて検討している。

第六節「荷田春満の学問思想の基本的性格」では、春満の学問思想とは、どのような性格のものであったのか、また、その学問思想を春満自身はどのように認識していたのか、について検討している。そのため、春満の学問思想を大局的に「神典研究に基礎を置く神道論」と「万葉集を中心とした歌文学」の二つの柱から成ると見て論考している。

第七節「春満と契沖」では、春満の学問思想とそれ以前の近世初期の儒家神道家は、契沖の学問業績を撰取しているか否かという一点で明確に区分できると考え、契沖の学問業績と春満の学問業績の関係について述べている。

第八節「春満の「古学」と「神学」」では、春満自身が自らの学問・思想をどう呼称していたのかについて述べている。そ

のため、松浦氏は史料に見る、およそ十五種の呼称を挙げて論じている。

第九節「神学」の別称としての「国学」」では、春満が用いた「神学」（神道の学問）に対応する呼称が増穂残口と藤塚知直の「国学」に相当するとし、「国学」の呼称は春満の没後、荷田家の方でも用いられるようになったと論考している。そして、「国学」の呼称は儒学を学問思想の基層とする神道家たちによって、「神学」の別称として用いられていたと述べる。

だが、松浦氏は、契沖からはじまり、真淵、宣長に継承されてきた「歌学」系統の学問思想を従来通り「国学」と呼称するのであれば、その一方の「神学」系統の学問思想には別の名称が必要になると考える。そのため、学問的な正確さを期そうとすれば、その二つの系統の学問思想を統合する何らかの概念と呼称が新たに必要とされる。そこで、かつて幕末維新期に広く一般的に用いられ、現在も高等教育機関で使用されている「皇学」を二系統の統合概念の呼称として用いることを提案している。「おわりに」では、本稿で論じてきたことの要点をまとめている。

続いて、神職課程の「神道神学」の教科書として用いられ、自ずと皇學館大学の「神道神学」を示していた谷省吾氏の『神道原論』について取り扱った、秦昌弘氏の「谷省吾先生『神道

原論』の成立』について紹介したい。

第一節では、谷省吾氏の代表的な著作として『神道原論』を取り上げ、秦氏は本書が神職課程の「神道神学」の教科書として昭和四十六年から平成五年までの長いあいだ用いられ、自ずと皇學館大学の「神道神学」を示していたと述べている。そして、『神道原論』の前篇第四章の「清々」は、「神道史研究」の昭和三十七年十一月号に掲載された「すがすがし」考―神道の境地の表現―を基本にしたもので、「すがすがし」考は、谷氏の学問を確認していく上で見逃してはならないもので、『神道原論』の成立に深く関わることを秦氏は指摘している。

第二節では、谷氏の発表論稿等について取り上げている。また、昭和二十八年十二月に刊行した『檀の實―鈴木重胤の研究―』に見られる「神世之語事と日本書記伝」は、古道の真意を解き明かすという「国学が抱えてある課題」についての深刻な対立を論じたものであり、谷氏の目指す国学研究の方法に基づいたものであると述べられている。

第三節では、谷氏が『檀の實』刊行以前に発表した国学関係の論稿は、鈴木重胤の学問を真淵にさかのぼり、宣長、篤胤等とその周辺の国学者も視野に入れ、それらの相違点を論じていることを取り上げている。また、昭和三十年代に入ってから発

表した国学に関する論稿は、神道については、国学を通しての記紀の解釈とその研究の歴史をおさえた上で、垂加神道を明らかにするという方法でもって進められていることを述べている。第四節では、谷氏の評論、随筆について取り上げている。秦氏は、谷氏が日本人の判断、行動の根底に「すがすがし」があったことを指摘し、日本人がもつ「すがすがし」の感性の深さを説いたことを取り上げている。

第五節では、谷氏の評論の骨子となっていたのは垂加神道であり、国学であったとし、谷氏の評論に見られる垂加神道と国学の接点について述べられている。そして、谷氏の評論の特徴は神道的なものを具体的に示した点であるとし、「生活のなかの神道」と題する連載の第一回「風呂」で、「すがすがしい」という感覚は、風呂に浸かるという毎日の生活の中に見られるものだと述べたことを取り上げている。

第六節では、昭和三十七年に皇學館大学が再興されると同時に、谷氏が国史学科の教授として迎えられ、日本書紀を講じたことを述べる。また、「神職課程」が神職養成のために設けられたことで、谷氏が「神道神学」の担当者として内定されたことを取り上げている。さらに、昭和三十七年十月の学内の史学会例会で「すがすがし考」という講演を行い、その内容を「神道史研究」に「すがすがし」考」として掲載されたことを挙げ、

昭和三十三年に「式年遷宮の意義」を発表後の四年間の「論文空白期」を経て発表された、大きな意味を持つ論考であると秦氏は述べている。

秦氏は、谷氏は「祓」を明らかにすることで、神道の本質に迫り得ることが出来るのではないかと考えていたことを明らかにし、論文「すがすがし」考が、「神道的境地を掘り下げたものとして」「前進をこゝろみた」ものであったという谷氏のことを紹介している。

第七節では、谷氏は昭和三十二年四月に発表した評論「辛苦の二字」で、「辛苦」が「つつしみ」であり、「敬」に通じることと取り上げている。また、つつしみが形式にあらわれた「一番大切なもののひとつは、はらへ(祓)」であり、それには、土が締まるほどの「辛苦」がともなうものである、という垂加神道の教えを強調したことを述べている。秦氏は、谷氏が「辛苦」と「つつしみ」によって「清々の地」に至る垂加神道の教えを、「すがすがし」考の内容に通じることを指摘し、谷氏にとつて「すがすがし」考は、「神道的境地を掘り下げたもの」であったと述べている。

第八節では、谷氏のいう「いのちのよみがえり」について述べている。そこで、谷氏の論評「ルソーの予感」で、ルソーの思想とは異なり、日本では社会を成り立たせているのは、「一貫

したいのち」への信頼である、と指摘したことを取り上げている。

「一貫したいのち」というのは、我々のいのちの本質は神々につながる神聖なもので、若林強齋が『神道大意』のなかで、いのちは「天の神の賜物をいただき切つて、敬み守る事也」と述べていることに通じると秦氏は指摘している。また、結婚による「生む」によって、いのちの広がり、つながりへと展開していくことで社会が成立していくとする連続性が神道の捉え方であり、ルソーの「契約」という思想とは「立脚点に根本の違い」があるとする、谷氏の思想が述べられている。そして、秦氏は、「祓へ」がもたらす「すがすがし」と神道の持つ「いのち」の連続性は、谷氏の「神道神学」の柱をなすと述べている。

第九節では、『神道原論』序説にみられる谷氏の問題意識が、「伝統は改変してよいのか」(『神道宗教』三十七号)の問題意識をもとに、新たに書き下されたものと述べている。そして、秦氏は、『神道原論』を構成する基本となった論考のうち、最初が「すがすがし」考、次に垂加神道に関わる「日之少宮の伝の論理」、三番目となるのが「伝統は改変してよいのか」であり、その後の論考が「神道原論」を構成する論文となっていると述べている。

第十節では、本稿のまとめを述べている。

最後に、神宮皇學館の海外修学旅行について扱った、長谷川怜氏の「神宮皇學館と大陸―海外修学旅行は学生に何を与えたか―」について紹介したい。

第一節「はじめに」では、神宮皇學館の海外旅行について論じた先行研究について取り上げ、大正十一年から昭和十五年にかけて実施した十九回の海外修学旅行の全体を通じた分析が行われていないと述べている。そこで、本稿では、海外修学旅行の概要について確認した上で、長谷川氏の先行研究（学生は大陸で何を見たか―神宮皇學館の海外修学旅行から―）で扱った、大正期の事例と比較しながら昭和期の旅行の特徴や目指された教育効果、学生の反応を分析することを述べている。

また、学生たちが現地を見ることによって大陸の人々に親近感や同朋意識を持つようになった一方で、現地の近代的な街並みなどは日本の国威を学生たちに感じさせたこと、将来の就職先として大陸を目指す考えが学内で定着していったことを述べている。

第二節「日本人による満州・朝鮮旅行のはじまりと旅行海外修学旅行」では、日本における海外修学旅行の始まりは、明治二十九年に長崎商業学校が実施した上海旅行であり、明治二十九年に「満州教員視察旅行」が企画されたのを皮切りに、全国の

学校が満州や朝鮮を対象とした独自の修学旅行を実施するようになったと述べている。そして、満鉄（南満洲鉄道株式会社）の鮮満案内所、ジャパン・ツーリスト・ビュローの後押しによって、大正期に入ると海外修学旅行を行う学校が更に増加したことを述べている。

第三節「神宮皇學館による海外修学旅行の概要」では、神宮皇學館の海外修学旅行について確認している。そして、長谷川氏は自身の先行研究で、大正期に実施された旅行記録を中心に分析しており、旅行によって学生たちの見聞が広がった（教育効果があつた）と教員によって判断されたこと、先進国である日本という優越感と遅れた中国・朝鮮という蔑視のまなざしを持ちつつも、現地での検問や人々との交流を通じ現地への親近感が醸成されたことなどを指摘したことを述べている。また、神宮皇學館の特徴として、各都市で第一に神社へ足を運び、玉串奉奠を行い正式参拝していることを挙げている。ここでは館友たちが神職として勤めており、長期にわたって海外修学旅行が継続でき、なおかつ円滑に旅程をこなすことができたのは館友による充実した援助があつたからだと述べている。

第四節「学生たちの見た大陸―大正期と昭和期の比較」では、「大正期と昭和期を比較した際に見いだせる違いとはどのような点にあるのか」と述べた上で、元号の変遷とほぼ同時並行で

満州地域には大きな政治変動や軍事的な動きがあり、それが神宮皇學館の旅行のあり方や参加した学生の意識・感想に変化をどのように与えたかを述べている。そこで意識・感想に変化を与える外的な要因と内的な要因を取り上げている。

第五節「満州建国と修学旅行」では、昭和七年以降、満州国成立によって日本の勢力範囲が満州全域に拡大しことで、学生の意識に与えた影響について述べている。また、皇學館の学生が現地の人々との「交歓」を重視あるいは希望したことについて考察している。

第六節「人々へのまなざし―蔑視と同胞意識の併存」では、日露戦争の激戦の跡を見ることで人々は日本の栄光の歴史を再確認し、満鉄が行うインフラの近代化の実態は先進国としての日本の姿を感じさせ、現地の人々の存在は、日本の先進性を際立たせるための「遅れた存在」として扱われたことを述べている。そこで、実際に現地を見た学生たちは、そこで生きる人々にかなるまなざしを注ぎ、何を感じたかについて述べている。

第七節「就職先としての海外神社」では、海外修学旅行において皇學館は一部の例外を除いて旅行社を利用せず、円滑な旅行は大陸に根づく館友のコーディネートによって実現したとし、彼らの姿が学生たちに海外飛躍の希望を少なからず持たせたであろうと述べている。そして、記録から判明する限りにお

いて海外修学旅行に出かけた全学生のうち約二割が外地で就職していることを取り上げている。

第八節「おわりに」では、本稿のまとめとして、十九回にわたって実施された、神宮皇學館の海外修学旅行が参加した学生に与えた影響を述べている。

以上、簡略ではあるが三つの論文を紹介させて頂いた。

皇學館が「皇学」を学ぶ機関でもあることから、筆者の独断でこれらの論文を紹介した。しかし、紹介した内容について、松浦氏・秦氏・長谷川氏の意図を十分に理解せず、また曲解したところのあることを懼れる。その場合は衷心よりお詫びし、ご海容を願う次第である。

さて、目次で示したように「皇学論纂」には多彩で有意義なものが収載されているので、拙稿をご覧の方々には御一読頂きたい。また、本書の刊行を契機として、皇學館の諸先生方の研究が広く認知され、研究の進展に貢献することを願っている。

最後に本書の刊行を慶び、皇學館の一層の御活躍をお祈りし、擲筆する。

(A五判、七七六頁、非売品、皇學館大学、令和四年発行)

(ながた いらい・皇學館大学大学院前期課程)